野良犬達の晩鐘　第二部

野犬の集団実験　その一　野犬収容センター

本来、我家の愛犬や近所の野良犬達の観察やら付き合いは、日常的な範囲に止まっていた。それは私にとって個人的な生活の一部ではあっても、それ以上のものではなかった。

一口に犬との付き合いと言っても、時と場所と相手によって、様々なことが付きまとう。そこには嬉しいこともあれば、悲しいことや驚くこともあって、一概にまとめてしまうのは難しい。

とはいえ、大学の研究室に飼われるネズミやモルモットなどの実験動物に比べて、自由に活動する犬の姿や習性は、私の新たな探究心に火を付ける結果となった。

ある日、私は大学の恩師に当たる先生の部屋を訪れ、少々無理な話かと思いながら、一つの研究計画を打ち明けた。それが野犬達の集団実験である。

戦中派といわれる時代に生まれた私の恩師は、極端とも言える科学主義者であると同時に、またすべての研究について、極限の厳密さを求める人でもあった。

だから、犬という動物の集団生活や社会に興味を抱いただけですぐ実験を始めたい、という私の話にすぐ頷くような人ではなかった。ところが、怯えながら自分の研究計画について私が話し終わると、その先生が即座に応えてくれたのだ。

「いいだろう、君の思い通りにやってごらん。実験期間もその成果や結果についても心配しなくていい。結果は後から付いてくる。やってごらん、・・・・・。」

最初、その言葉自体が分からなかった。何を言われているのか、またそれがゴーサインなのかどうか。本当に分からなかった。しかし、頭を下げて恩師の部屋を出るとき、私は思わず叫んでいた。

（そうか、先生は私の計画にゴーサインを出してくれたのだ、・・・・・！）

震えるほど嬉しかった。そうした恩師の言葉に、心から感謝したいとも思った。初めに抱いていた意外感も、いつの間にか消えていた。

三週間後、私は最初に大きな犬小屋を作った。それから細々としたものを買い揃え、最後に札幌市の野犬収容センターに出掛けた。私はそこで、五頭の逞しそうな牡犬を手に入れる予定だった。

その当日、私は大学から車を借りた。それから、大学院生の一人を誘って、大学の北西部にある野犬センターに出掛けた。

私はそこで、同じ大学の人間に出会った。一人は薬学部の人間、それから他にも、獣医学部や医学部の関係者もそこにいた。

彼等が何故、野犬センターに来ているのか。それが不可解で、私は個々に訊ねて歩いた。ところが、相手変われど答えは一つ。野犬狩りで集められた犬を使って、各々実験するのだという。しかも彼等の言葉を借りれば、

「私達は毎週こうして来ています。ただ、貴方のような動物心理学と違って、私達の研究や実験では、ここで手に入れたすべての犬を最終的には殺します。まあ、私達の研究は殺伐としたもので、残酷なものですよ。」

ということだった。

そこでふと、私は頭の隅で考えた。何が残酷で、何が残酷でないのかと。しかし、目の前で多くの野犬がワンワン騒ぐと、それはすぐ取り止めた。その替わりに、

「お宅からどうぞ。」

という言葉に誘われ、私は大きくて逞しい犬を次々に選んだ。

やがて、目標の五頭が揃った。すべて予定通りとまではいかなかったが、それでも車に乗せ終わった五頭を見直してみると、私は取り合えず満足に思えた。

大学の研究室に戻り、大学院生の手を借りてその五頭を新設の犬小屋に収容した。ところが予想通りというべきか、犬小屋の中ではすぐ激しい怒号合戦が始まった。

それはうるさいという言葉を遥かに超える喧騒で、周囲のことを考えると、すぐなんとかする必要があるのは確かだった。

野犬の集団実験　その二　仲間喧嘩

私は隣に並んで立つ大学院生の顔を見た。しかし、こちらの願いも虚しく、相手は無関心を装う。仕方なく一つ深呼吸をして、腹を括りながら犬小屋に入る決意を固めた。

まず、小屋の中の様子をもう一度窺う。それから入口の怪しげな扉を開き、犠牲覚悟で中に入る。後ろ手にそれを閉め、目に力を込めて辺りを見下ろす。

必用もないのに、犬の数を数える。そうしながら、犬達の個性やら性格を推し量る。

私の心も落ち着く。犬達の素性も見えてくる。本来の飼犬、生来の野犬か野良犬。

仲間同士では猛々しくとも、人間に対して従順に見える犬。気が本来は小さいのに、威嚇だけは一人前の犬。幾ら周囲から吼えられても決して逆らわず、ひたすら媚びへつらう犬。しかし、どの犬にしても、侵入者の私に向って威嚇したり吼えたりするものがいないのは不思議でならない。

思い切って、私は全員の頭を撫でる。そうすると、大半の犬が尾を振り、親愛の情を示そうとする。それは私にとって有難いことだが、どこか腑に落ちない気持も跡に残る。

（これでいいのか。どこかに落とし穴はないのか、・・・・・・？）

不安を残しつつ、一先ず犬小屋を出る。それから大学院生を促し、研究室に立ち戻る。

野犬センターに出掛けたのが金曜日。そして一夜明けた翌日は週末の土曜日。通常なら、この日の午後から日曜日の終わりころまで、ゆっくりと休める。しかしこうして、野犬の集団を集めてみると、目の届かないその一日半に不安を覚える。

そこで、土曜日は朝早くから大学に出て、五頭の様子を細かく犬小屋の外から観察する。それから何度も犬小屋に入り、手製の餌の世話をしながら、全員との肌の接触を深める。

一見すると、その効果は抜群。飼育開始二日目にして、彼等の間に起こる喧嘩や諍いが姿を消し、とても穏やかな雰囲気が犬小屋全体に漂う。

（さて、これで週末の夜から日曜日の夜まで大丈夫なのか、・・・・・・？）

期待半分にして、不安も半分。

（ともかく、これで一度やってみるしかないだろう。）

それは私が出した取り敢えずの結論。一頭づつ餌も水も余分に与え、心を残しながら大学を離れる。

月曜日の早朝、私は大学への道を急ぐ。事態の確認を急ぐ上でも、さらに犬の間の危険な乱闘を未然に防ぐ上でも、今朝は一刻のときを争うような気がしてならない。

家から出て四五分後、バスと市電を乗り継いだ私の身体が自分に与えられた

研究室に辿り着く。そこで鞄を机に投げ出し、急いで建物の裏側に回る。
すぐ目の前に迫る犬小屋。私はその内部を鋭い目付きで観察し、不幸な結果が出ていないかどうか確かめる。
しかしどうやら、期待は期待で終わったようだ。期待は見事に外れ、不安の方が目の前にある。
野犬センターから手に入れた五頭の牡犬の中に、体格の割りに態度のでかい赤犬がいた。それが今、犬小屋の端に倒れているのだ。
私は言葉を失う。だらしなく伸びる四本の手足。土やドロで汚れ切った全身。落ち込んだまま開かない二つの目。
今更誰が犯人で、誰が共犯なのか目星も付かない。仕方なく犬小屋に入り、問題の犬を抱き上げる。
身体に硬直の気配は見えない。わずかな温もりが両腕と胸から伝わってくる。
それにしても、大きく口を開けた傷の数は悲惨極まる。見るも無残とはこのことを置いて他にはなさそうだ。

野犬の集団実験　その三　殺されたアカ

倒れていた赤犬をそのまま研究室に運び、周囲の仲間や学生に断って自宅に持ち帰る。
突然、自宅に戻ってきた私の姿を見て、妻が驚く。さらに、私の抱えた血だらけの見知らぬ犬を見て、その驚きは極限を迎える。
「貴方、これどうしたの！」
「まあ、話が長くなるから後にしてよ。」
「でも、これは余りにひどいわ。まだ生きているの？」

「勿論、・・・・・・。」

妻の手を借り、数えて二七ヶ所の傷に消毒薬をたっぷり振り掛ける。それから全身真っ赤になるほど赤チンを塗って、古い毛布の上に横たえる。

次に近所の市場の中にある顔見知りの魚屋に出掛けて、マグロの血合いを大量に買い込む。それを両手にぶら下げ、再び自宅に持ち帰る。

痛みを伴う治療の間も、赤犬の目は開かない。それをそのままにして、マグロの血合いの切り身を、ひとつひとつその口に放り込む。

不思議なもので、意識のない赤犬なのに、口に入った血合いの切り身は赤犬自身の力で、次から次へと胃袋の中に飲み込まれる。

三日後、赤犬にようやく意識が戻る。両目が開き、立ち上がると私に向って親しさ一杯の挨拶を始める。

そのすべてが、私にとっては不思議な光景。驚くほど短期間にすっかり元気になったことも、さらにまだ浅い付き合いの相手にこうして親愛の情を現すことも。

（これは一体なんなのか、・・・・・・？）

私にはまったく理解出来ない。ただ、結果の方はオーライなのだから、誰かに文句をいう話でもない。

我家に来て六日目の土曜日、全身の傷口が完全に塞がったのを確かめ、私は赤犬を大学の犬小屋に連れ戻す。それから、他の四頭に語り掛け、これ以上の騒動を起こさないように頼み込む。

その際、四頭の犬はとても素直で、従順さはこの上ないように思える。だから、

（これならもう大丈夫、・・・・・・。）

と確信を持ち、再び疲れた身体を引き摺りながら自宅に戻る。

翌日の日曜日は完全休暇。そしてさらに翌日の月曜日、私はなんの不安もなく大学へ出掛ける。しかし、そこで私が見たものは、すでにはっきりと死後硬直の様相を見せる赤犬の死体だった。

野犬の集団実験　その四　不思議な話

赤犬殺害事件があった一ヵ月後、どうやら五頭の牡犬を使った集団実験の準備が整った。

その実験で私は二つのことを確かめたかった。一つは、個々の体力や気力と、集団内での強弱関係。もう一つは個々の犬の知能と、誰がトップリーダーになるか、という問題だった。

幸か不幸か、当時日本の大学では各地で未曾有の大規模な紛争が始まっていた。それは後世に残る社会現象でもあり、学園紛争とか大学紛争と呼ばれるものであった。

全国の大学に先駆け、日大と早稲田でその紛争が起こった。初めの内、それらの紛争は個々の大学問題で終始していたが、中心となる拠点が東大に移ったときから、紛争の火種は次々と拡大の一途を辿った。

当時、私の通う大学も例外ではなかった。ヘルメットにゲバ棒、打ちつづくデモに大衆団交。学生も院生も、終夜を問わず議論と行動に明け暮れた。

やがて、大学が学生達によって全面封鎖もしくは全面閉鎖という非常事態に追い込まれた。それは大学内で当初から予定されていたすべての授業中止、もしくは期限のない中断を意味する。

ただ、大学の全面封鎖や全面閉鎖というのは、私の実験にとって不幸な話とばかりならなかった。何故なら、学生によって封鎖された大学の中は、普段の

人通りも少なく、周囲の人から文句や苦情を言われる機会も極端に減っていったからだ。

ともかく、そんな周囲の情況の下で私の野犬集団実験が始まった。

季節は晩秋の十月末から十一月。日々肌寒さの増す、落葉の時節でもある。

私の予定していた実験は一日二回。昼の一二時と、深夜の午前零時。その二つの時刻で犬の様子や雰囲気が変わるかどうか、ということも実験目的の一つに加えてあった。

予定した実験は、順調に進んだ。元来が野犬とはいえ、五頭の犬は皆私に従順で、仕事を妨げる犬も不思議に出てこなかった。

しかし、時間が経つに連れて、ある問題が起こった。それは私の中に蓄積し続ける疲労の問題。これに対処する手立ては、見当たらない。

深夜一二時の実験中、私の疲労に由来する事件が起こった。

実験中、私は最初にどれか一頭の犬を犬小屋まで迎いにいく。それから、どれかの首輪に手綱を取り付け、再び実験室に連れてくる。ところがある夜、歩きながら記憶を失い、気が付くと、私の後につづくべき犬の姿が消えている。

（え、あいつはどうした、・・・・・・？）

私は慌てた。その時歩いていた廊下を逆に走り、暗闇の中に飛び出した。しかし、暗い外灯の届く範囲に、期待した犬の姿はやはりなかった。

仕方なく、私は犬小屋に向った。そこに着くと、鈍い頭で頭数を数えた。

（一頭、二頭、三頭、四頭、・・・・・・？）

幾ら数えてみても、その数は四頭止まり。五頭目の犬の姿はそこにない。

「おい、アイツはどうした。教えてくれよ。」

だがそれは、勝手すぎる人間の態度。目の前の四頭が答える筈のない、無意味な問い掛け。

ここで一頭の犬を失うことは、実験すべてを振り出しに戻すこと。あるいは、野犬の集団実験を放棄することに繋がる深刻な情況。

返事も収穫もない犬小屋を離れ、もう一度出入口付近の暗がりに見えなくなった犬の姿を探し求める。でも、結果はやはり変わらない。

茫然自失、疲れ過ぎているせいか、絶望感は湧いて来ない。うなだれ、力なく誰もいない研究室に戻る。それから、ふと考え直し、さらに奥の実験室を覗いてみる。

不思議なことに、何故かそこには首輪のない一頭の犬が居て、目の前に現れた私の姿に尻尾を振って応えている。

一瞬、私は目の前の光景が理解出来ない。何故、その犬がそこにいるのか。何故、その犬は絶好のチャンスに逃げ出さないのか。茫然自失の頭はただ、古くて汚れの目立つ空間にさ迷い歩く。

しばらくそのまま、時が流れる。それからふと我に返り、呟くような言葉が口元を離れる。

「おい、お前は切ないやつだなあ。どうして逃げなかった。原因のすべては俺にあるのだから、逃げ出したって、お前が怒られ理由などまったくないんだ。それにしても、お前がここにこうして待ってくれたことは、何者にも代え難いほど嬉しいよ。有難う。これで実験の目処も七割程度は立ったから、・・・・・。」

後日、すべての実験が終わった時に私はもう一度考えた。何故あの犬は魅力もなく、義理すらないあの場所から自由な世界に逃げ出さなかったのか。さらに何故、あの犬は自分の意志で実験室に入り、私の到着を待ち受けたのか。

私にはまだ納得した答えが見えて来ない。それは多分、最初から答えのない疑問だったかもしれない。

下北半島の野犬と山犬

昭和二十年代の中ころ、我国に狂犬病予防法という法律が出きた。この法律は日本が太平洋戦争に敗れた直後、国内に狂犬病の猛威が広がったのと深い関係がある。

それはともあれ、狂犬病予防法という法律の狙いは唯一つ。我国から犬を媒介とする狂犬病を完全に撲滅することであり、そのために犬に対する毎年一回の予防注射の徹底と、犬小屋や鎖を用いた管理の徹底を国民に義務付けるということであった。

確かに、この法律は日本の国会で承認された。しかし、何時どのような形で国民に定着させるかという具体的な話になると、その実現はまちまちだった。

たとえば私が当時住んでいた札幌市の場合。いわゆる野犬狩りという手段による法律の徹底は、冬の札幌オリンピック開催前年に当たる昭和四六年からだったが、場所を札幌から本州最北端に位置する青森県の下北半島に移すと、同じ対策が昭和六十年代の前半まで引き伸ばされていたのも事実である。

その一方、札幌市内で野良犬達との出会いの日々が始まると、科学心理学とか実験心理学に対する私の嫌悪感は手に負えない段階を迎えた。その一つの具体的話が大学を離れて下北半島に純粋な野生ザルの世界を訪ねることであり、昭和四七年十二月末、初めて下北の土を踏んだのを私は記憶している。

以来、夏と冬の年二回という私の下北通いが始まり、平成二十年の今日まで細く長く続いている。

そんな下北通いの三年目、昭和四九年夏に、私は野生のニホンザル観察の代わりに、下北半島の大間崎一体で市街地の野良犬から山岳部の山犬まで、広く追跡する機会に出会った。

海岸から十キロ前後。下北の山岳地帯はきわめて規模が限られる。しかしそこには、日本全体からすでに姿を消してしまったと言われる純野生のサルの群れも立派に生き残り、天然記念物のニホンカモシカにしても、現地一帯に広く生息していた。だから、旧林野庁の全面森林破壊という問題に眼を瞑ることが出来れば、下北半島は国内屈指の野生動物の宝庫、といっても過言ではない。

私の野犬追跡活動は最初、そうしたニホンザル達の棲む山岳地帯。私はそこで、何度か山犬の集団に出会い、ニホンザルやニホンカモシカを追い続ける彼等の恐るべき執拗で獰猛な姿にも、繰り返し遭遇した。

山で遭遇する山犬の集団は小さいもので二、三頭。大きくなると七頭から八頭の集団もあった。

山で出会う彼等は、一概に危険な相手だった。極近い距離で人間と出会う場合など、彼等は一斉に唸り出す。それから集団が徐々に旋回し、鋭い牙を剥き出して人間を取り囲もうとする。

そんなとき私はじっと同じ場所に佇み、逃げ出すことも、威嚇して追い払うこともしない。それが唯一、私に許された選択であり、かつまた唯一つの身を守る方策だったからである。

山岳地帯で遭遇するそうした山犬の多くは、体格に優れたものはいなかったが、ただ常に集団で生きる彼等の存在からは、絶えず凶暴な匂いが付きまとった。

次に、私の調査は山岳地帯から海岸線に移った。そこには自由に歩き回る野良犬や野犬が数多く棲み付き、付近住民の不安を掻き立てていた。ここに、現地で聞き込んだある老婆の話がある。

わしなどのような老婆や子供達は、夜八時をすぎたら外に出られない。

危なくて怖くて、あの犬達から見たら、人間なんて弱いもんさ。なんであんなに危険な犬、生きてるべか。

海岸地帯に棲む犬の多くは、打ち棄てられた廃船の中や周りで休息を取り、夕方から夜に掛けて、市街地に繰り込む。彼等の主な餌は海岸の岸辺にとり残された魚の死骸と、市街地に日々放置される残飯の数々。

その一つの情景を私がカメラにおさめようとした時など、一頭の大きな牡犬がこちらを振り向き、牙を剥き出しにして吠え掛かった。

距離なら三十メートル。時刻は夜明けの直後。人通りはなく、私とその犬だけが、市街地の同じ道の上に立っていた。

その中の一枚の写真を、人間は何故犬に咬まれるか、というタイトルの評論と共に、当時の月刊雑誌アニマ（廃刊）に寄稿したことがある。

古くなったその雑誌を今手にして、私はあの犬の写真を眺める。するとあのとき抱いた瞬間の恐怖が胸に蘇り、今更ながら、下北の野犬というものが稀に見る迫力と脅威の持ち主だったことを思い出す。

大学紛争の時代　その一　ある助教授の決断

昭和四五年前後の五年間、日本全国の大学は乱れに乱れた。

大学の建物は皆、文部省でも大学の教授会でもなく、多くの学生達の管理下に移った。授業は完全に停止され、ゼミも開かれなかった。

逃げ惑う教授達は大衆団交の場に呼び出され、学生達の厳しい追及の的となった。一度そうした場に呼び出されると、教授達は三十分や一時間で解放されることはなかった。少し長くなれば三時間から五時間、最悪の場合は十時間か

ら半日の吊るし上げが、名の知れた教授達を待ち受けていた。

大学紛争の最盛期、学生達の活動は学生以外の人々を巻き込み、多方面の問題に拡大していった。国家の権力者、大企業の経営者、最高裁判所の裁判官、さらには教会の牧師や神父から大組織の仏教関係機関など、吊るし上げる人間も吊るし上げられる人間や組織も、様々だった。

そんなある日、西洋哲学科の助手をしている友人が私の荒廃した研究室を訪れ、自分の上司を警察から取り戻す運動に手を貸してくれ、といってきた。

そこで相手に具体的な説明を求めると、べ平連の代表を勤める自分の講座の上司ＨＫ助教授が今日の街頭デモ中に逮捕された、という。

私とその助手とは元々大学で同期だったが、特別それ以上の関係はなかった。その上、彼の上司というＨＫ助教授については、面識もなければ、会話をかわすことも、それまで一度としてなかった。

しかし当時、大学で助手を務める人間として、私も当事者の一人だった。また、ヘルメットやゲバ棒を積極的に振りかざさないにしろ、私は私なりに大学紛争もしくは大学闘争の意味や究極の目的等について、身近な自分より少し若い学生や院生達と日夜議論を交わしていた。

そんなことから、余りよく考えもせずに、私は相手の申し出を快く受け入れた。ところが、そのとき口にしたたった一つの言葉イエスが私を一気に、当時の紛争や闘争の渦中に巻き込んでいったのである。

同僚の彼はまずその夜、私を一軒の家に案内した。そこがＨＫ助教授の自宅だった。

その家に入ると、中には先生のまだ若い奥さんと小さな子供さんの他、十人程度の人間がいた。こちらから挨拶すると、そこにいる十人すべてが今回の救出活動に参加した人だという。

その夜、私達は議論に耽った。どうしたらその日警察に逮捕されてしまったＨＫ助教授を即座に救出できるか。あるいは、自分の信念をこれからも貫くであろうＨＫ助教授の身柄をどうやって警察から守るか、という話題がそのとき交わした議論の中心であった。

ただ、そのとき集まった私達は議論こそ上手く出来ても、具体的かつ現実的な解決方法など、誰一人知るよしもなかった。

私達が手をあぐねて四日後、ＨＫ助教授は自宅に戻った。本人の言葉によると、警察が勝手に釈放したのだという。すると誰かがすぐ、

「それは本当によかった。これで安心して私達も本業に戻れる・・・・・！」

といって拍手を始める。それを受けて、その場の皆も一斉に拍手を始めたのだが、どうもＨＫ先生本人の表情が冴えない。とはいえ、その日私達は各自の自宅に戻った。

数日後、また例の助手仲間が現れ、反省会を兼ねて先生のお宅に集まろうという。

（まあ、行き掛かり上、それもそうだ。）

と私も考え、再び車でＨＫ助教授の家に向う。

ところが、安易な気持で出掛けた私を待ち受けていたのは、ある印象的な出来事だった。

先生のお宅の玄関から案内されて居間に入ると、そこには真剣な顔付きの先生と奥さんがいて、私達との簡単な挨拶が済むと、即座に夫婦の会話に戻った。

「実は君、今日はここで重大な話がある。」

「なんでしょうか。」

「私は今日、東京に居る大財閥の父親に親子の縁を切ってくれるよう、手紙を書きたい。それと同時に、大学には辞職届を出すことにしたいがどうだろう

か？」

「今すぐですか？」

「まあ、早ければ早いほどいいかもしれない。なぜなら、私のべ平連活動は今後もっと活発になるだろう。そうしたら、親にも大学にもさらに迷惑を掛けて

しまう。この際、それを避けたいんだ。」

「私は貴方の妻ですから、深い理由は別にして、貴方の決意を分かります。ただ、・・・・・。」

「確かに、我家の生計をどうするかという問題は残るね。」

「貴方、分かったわ。後六ヶ月待って下さい。そうしたら、私も保母の資格が取れますし、保母として働き始めることも出来ますから。」

そんな夫婦の会話を、ＨＫ助教授の助手を務める私の同僚がどう受け止めたのか、私はいまだに知らない。ただ、私本人についていうなら、その日その場で聞かせて戴いたＨＫ助教授ご夫婦の会話こそ、終生忘れることの出来ない貴重な一場面として、頭の中に刻まれている。ちなみに、あの日から四十年後の今、ＨＫ助教授は有名な社会評論家として活躍しておられる。

大学紛争の時代　その二　助命願い

丁度そのころ、私の野犬を対象とした集団実験が始まり、そして終わった。その結果は必ずしも本人の納得するところでなかったが、ともかく、三ヶ月間の実験は終わっていた。

そんなある日、私はまた例の大学院生を呼び出し、協力を求めた。

「君、済まないが、また手を貸してくれないか。実験が終わったのであの五頭

を野犬の収容センターまで戻したいんだ。私は車の中で待ち受けるから、君は一頭づつ犬小屋から運んでくれないか。」

「はい、分かりました。どれからにします、・・・・・・?」

「それは君の判断に任せるよ。」

話し合いは簡単に終わった。それからすぐ、私達は行動に移った。

先ず、私が大学から借りた車の後部に乗り込み、受け取るための準備を始める。その間に、彼は私の前から一旦姿を消し、研究室の裏側にある犬小屋へと向う。

待つこと五分、最初の一頭が大学院生の握る手綱の前を歩きながら、こちらに近付く。その姿からは車の中の私を見て喜んでこそいても、怯えた雰囲気など見受けられない。この際、それは大変助かるし、余分な手間も省けて有難い。

次の犬も、また次の犬もそれは変わらない。全員が尾を振り、すっかり懐いてしまった姿がそこにある。

ところが、同じ作業が続いて四頭目から五頭目に掛かると、情況は一変する。

「おい、どうした。最後のヤツがまだ残っているじゃないか、・・・・・・?」

目の前に大学院の学生が居て、どうしてか動かない。態度もぐずぐずしているし、その表情に不可解な色を浮かべているような気がする。

それでも、私は待った。追及の手を止め、普段見せる相手の誠実な姿にすべてを委ねる。

時間が流れる。遠くから見知らぬ学生集団の叫び声も聞こえる。それが、長引く大学紛争で荒れ果てた周囲の景色の中で、奇妙にマッチしているのに驚きを覚える。

事態は硬直、私も相手の大学院生も動かない。

時間の余裕は十分ある。今は昼食を終えて間もなくのとき。野犬センターの

引き受け終了時刻は夕方の四時か四時半。だとすれば、今ここで騒ぐ必用がないのは私にも分かる。

しかし、この硬直してしまった時間はやはり勿体ない。深い訳もない話だから、すぐ解決してしまうのが得策だろう。

「それじゃ、僕が連れて来ようか？」

その言葉に合わせて、私は車から地面に降り始める。するとようやく、相手の口から言葉が漏れる。

「いや、そうじゃないんです。どうせやるなら、僕がやります。しかし、・・・・・。」

返事がどうも分からない。やるのか、やらないのか。今まで通り自分で連れてくるのか、来ないのか。その辺りが一向に分からない。

「ともかく、君に聞きたい返事は簡単なんだ。すぐアイツを連れてくるのか来ないのか。もし君が敢えて連れて来ないなら、私が納得するように話してくれないか。頼むよ、・・・・・。」

穏やかに話し合うとすれば、元々短気な私の場合、それが限度で限界だった。

すると、駄目押しする私の前で、彼から真意が伝えられた。

「実はあの犬だけ、野犬センターに戻したくありません。僕が自分のために、自分の金で飼おうと思います。お許し願えますか？」

相手から聞く突然の話に、私は戸惑った。何故今更ここで、彼がそんなことをいうのか。考えようとしても見当が付かない。

黙って相手から目線を逸らす。ぼんやり意味もなく周囲を眺め、次に足元の土を軽く蹴る。

私にとって、あの汚くて煩い野犬センターから貰い受けた犬はすべて、特別意味のない連中に過ぎない。当初から受継いだその考えは、ごく当然の話で、不都合とも不適切とも思えない。なのに何故だ、・・・・・？

思い直し、相手の顔を眺める。そこには一人の強い意志をもつた男がいて、私の決断を待っている。

「まあ仕方ない、いいだろう。ただし、あの犬を持て余したからといって、餌もやらずに放置するのは許さんぞ。いいね、・・・・・。」

「分かりました。約束します。」

話は決まった。私達は四頭の犬だけを車に乗せ、札幌市の野犬収容センターに向う。

その帰り道、落ち着きを取り戻した私は、大学院生の本音が聞きたくなった。そこで車を運転しながら、脇に座る相手に聞いてみた。

「なぜ、アイツなんだ。何故、あの一匹だけの問題なんだ！」

すると、彼は少し遠慮がちにこういった。

「僕は秘かに、あの少し毛の長いアイツをシロと呼び、特別な目で眺めて来ました。あの余裕のあるゆったりした面構えに魅力があって、外にだしてやっても、決してアイツは逃げ去らないんです。というか、私に彼一流のやり方で遊び掛け、それを心から楽しむ姿に僕は惹かれます。アイツは僕達より本当の自由な生き方を知っているし、僕達こそアイツに学ぶことがあると思っています。」

その言葉を片耳で聞きながら、私は一瞬、この男は長引く学生運動で頭が少しいかれてしまったのかもしれない、と思った。ただ、その自分の解釈について、私に確固とした自信もなかった。

大学紛争の時代　その三　楽天家シロ

大学紛争の時代は昭和四四年にころ始まり、それから五年後の四九年か五十

年にほぼ終わったと言われる。その終わりを告げる象徴的出来事を全国的に見れば、悲惨極まる浅間山荘事件ということになり、私達北海道の人間にとっては昭和五二年に開催されたあの札幌冬季オリンピックという華やかな舞台になる。

一人の大学院生の要望で命が救われた犬シロ。特に上半身や頭が大きくしっかりしていたこの犬は、身体の毛が普通より長く、風格のある犬ではあった。

しかし、初冬の時期に夏毛から冬毛に換わると、白一色の体毛に変化が起こり、両の耳と尻尾などに薄い茶色が加わった。そのことは、この犬の年齢がとても若く、精々で一歳かそこら、ということを暗示していた。

仲間から離れて単独生活に入ったシロは救世主となった大学院生の見立てが素晴らしかったのか、私の目から見ても、特別な犬に思えた。

本来が、札幌市の野犬センターに集められるような素性の野良犬であった筈なのに、シロの性格は穏やかで、陽気で活発だった。

その年の暮から正月に掛けて、大学は少し長めの冬休みになった。そうなると、毎日大学に出てくる人間の数も極端に減り、除雪されなくなった大学構内全体が広い雪原に変わった。

そんな時期でも、研究室には幾多の動物が飼育されていた。私は毎日、自宅から大学構内の研究室に唯一人通い続け、研究室全体の管理を引き受けた。ところが、いざ一人で通い始めてみると、障害になる最大の難題として、毎日のように降りつづく雪の問題に直面した。

まず、札幌駅の北口から大学の正面玄関までの道はよかった。しかし、正面玄関から私の研究室に向う約二百メートルの道は問題となる。除雪作業の止まったその道筋には一晩で三十センチ。それが三日も続けば、ほぼ一メートルの新たな積雪が大地を埋める。

そうなると、わずか二百メートルの距離を越えるのに二、三十分の悪戦苦闘の時間が掛かる。

正月元旦、自宅を出る時から、私の心は重かった。

（あれを今日、どう越えるか、越えられるか。）

それがやはり問題だった。ところが、大学の正門から細々とつづく人道を辿り、さらにそこから右折して北に向うの脇道までくると、新雪の上にきちんと座ったシロが居て、私の姿を待ち構えている。

これには本心、驚いた。それも状況が状況だったから、嬉しくてたまらない。

「おい、シロよ。お前は本気で俺を待っていたのか？」

私は溢れる喜びを咬み締めながら、シロに聞いた。すると相手は、全身を私の身体にぶつけるようにして、こう答えた。

（当たり前じゃないか。俺達、誰もいないこの正月休みの間は戦友だろう。ここで朝からじっと待っていたさ。新雪の上は最高だよ。手足が埋まって困るのなら、飛び跳ねながら歩くのさ。ほれ、この通り。）

シロは自分の言葉通りに、新雪の上を飛び跳ねる。行き先は勿論、動物と人間が一緒に暮す我々だけの研究室。ネズミやモルモットの他、ウサギも居ればリスもいる。

身体が人一倍大きく、体重も三十キロはあるシロに先導されると、道なき道も苦にならない。その上、新雪に足を取られて私が転ぶと、シロはその上に飛び乗って遊びを仕掛けてくるから、ぼんやりともしていられない。

やがて、普段の半分の時間で研究室の入口。そこから先は大正時代に建てられたという古い木造の建築物。天井の高いのは我慢出来るとしても、大学紛争で数ヶ月間も清掃が放棄されている現実は戴けない。ともかく、鍵のない入口から中に入る。

入口につづく廊下はとても暗い。小さな窓ガラスは汚れたまま、スイッチを入れた天井の蛍光灯もチカチカするばかりで、その役を果たさない。
背が高くて重すぎるほど重いドアーを開けて一つの研究室に入ると、すぐ眼に飛び込んでくるのはゲバ棒とヘルメット。すべては繰り返し街頭デモに出掛ける学生達の必需品。これが無ければ、彼等のデモも成り立たない。
そこで私を迎えてくれるのは、女子学生や女性の事務官が普段から可愛がっている韓国産のシマリス君。名前こそ知らないが、人が近付くと喜んで走り回る様子は、私の心を和ませる。
石炭ストーブに火を付け、足元に寝そべるシロに語り掛ける。
「おい、シロよ。お前は一体、長い夜をどうしてる。それに、どうしたら、入口のドアーを開けずに外で私を待てるんだ？」
すると、重い首をもたげるようにしたシロから、声無き返事が戻ってくる。
（くだらん質問は止めてくれよ。外に出るのは、そこの壁の隙間を上手く通り抜ければ簡単さ。そんなことより飯をくれるのか、また外に出て遊ぶのか、あんたの選択は二つに一つだ。どうする、・・・・・？）
身体もでかいが態度もでかい。それがシロのシロたる由縁と言えばそれまでだが、そんな返事を返された本人の私に、笑顔が浮かんでしまうのは何故だろう。ふと考え、やがて考えたことすら忘れてしまう。
午後早く、私は野暮な仕事を終えて研究室を離れる。その際、憮然として見送るシロに向かい、半分笑いながら声を掛ける。
「シロ、後は頼んだぞ。浮浪者が入り込むかもしれなし、誰かが悪戯で火を付けないとも限らないから。」
その返事がまた、私には面白い。
（そう簡単に馬鹿言わんでよ。誰が一銭の金も貰わずに、そんなことを気安く

請け負うんだ。まあ帰りたければ、可愛い家族のいる家にだって帰ればいいさ。俺の知ったこっちゃないけどね、・・・・・。)

外はまた大雪。しかし、シロの別れの言葉を背中に聞く私の心は愉快な気分に溢れている。

大学紛争の時代　その四　集中講義

大学紛争に明け暮れた当時の大学では年度末なると、辻褄合わせの集中講義が至る所で始まる。本来なら、その集中講義も破壊し、中止に追い込むべき大学紛争の闘士達も、何故かそうした講義を受けて、卒業証書に手を伸ばす。

その点でいうなら、私の周りの学部学生も、また大学院の学生達も変わらない。ゲバ棒とヘルメットを脱ぎ捨て、慌ててペンやノートを買いに走る。

掲示板に張られた予定表に沿って、集中講義が始まる。それに応じて、私の周りの学生達も、いそいそと百メートルさきにある新館の中講義室へと先を急ぐ。

そんなとき、シロは学生達の間に挟まり、何の苦もなく、堂々と講義室の敷居を跨ぐ。

その入口に立ち、シロは一瞬考える。部屋の収容力に比べ、出席した学生数が多すぎるのだ。

しかし、シロは怯まない。入口側の狭い壁の隙間に沿って前に進み、唯一の空間とも言える教壇の上に登る。それからもう一度辺りを見回し、改めて教壇の中央に自分の居場所を定める。

数分後、東京女子大からきた非常勤講師の先生も、シロの通ったルートを使って教壇に近付く。しかし、そこでシロの姿を見ると二、三歩下がって考える。

（授業はこの状況で始められるか。鞄と外套は教壇の上の机に置けるだろか。
自分の立って話を始める場所は教壇のどこかにあるだろうか、・・・・・？）
大学紛争中でなければ、女子大からきたというそのスマートで華奢な先生も、横柄な態度でシロを講義室から追い出したに違いない。しかし、そのときは紛争の真最中。仕方なく、先生は講義を始める。
最前列の学生の机に片手を置き、足の置き場を教壇の隅に定める。それから講義の開始という訳だが、どうも先生の身体が歪んでいる。
足から腰までなら問題がない。ただ、何故か腰から上の上半身がシロから離れる方に傾いている。
全席満員の講義室に笑いがこぼれる。しかし、自分の姿勢を意識出来ない本人の先生は笑わない。シロも笑わない。何故なら、彼は講義開始と共に眠り始め、講義の終りまでその目を開けることがないからだ。
同じ状況がつづくなか、東京女子大からきた先生の集中講義が一週間後に終りを告げる。
その数日後、普段から仲の良かった男女の学生が、シロも一緒に車に乗せて我家を訪ねる。夕食の折り、衆議一決という形で翌日の遠出と、ソリ滑りの話がまとまる。

大学紛争　その五　馬騒動

翌日は快晴そのもの。朝食後、二台の車に分乗して現地に向う。その際、私の車の助手席はシロが独占。仕方なく、上の四歳の娘は学生の車に乗せてもらう。
目的の場所は家から車で十五分のところにある開拓農家の農地と山林。季節

は三月初め、土の上に積もった雪の量は一メートルを超える。
予定した時間で現地に到着。すぐ勝手に走り回ろうとするシロを呼び止め、首輪に綱でプラスチックのソリを留めて、道路脇から農地の外れに見える丘に向う。
足元はすべて、純白の世界。ただ、一日の温度変化が大きくなり始めた三月のこと故、雪中の行軍もどうにかなりそうだ。
しかしそれでも、長めの防雪靴を履いた足元はなかなか前に進まない。その上、低いながら坂道を皆揃って登る訳だから、一歩一歩に力が入る。
丘の上に到着する直前、それまで素直に付いて来ていたシロの様子がどうもおかしい。その目線を辿ると、遥か彼方の農家の家が見え、その少し手前に大柄の農耕馬の姿が見える。
（何にも変なことなどないじゃないか・・・・・。）
しかしそれは、大変な間違い。後悔は先に立たず、覆水も盆にかえらない。
一瞬浮かぶ冷や汗、次の瞬間、ソリを首に繋がれたままのシロが一気に坂を駆け下りて行く。
「やめろ！」
私は叫んだ。それと同時に、すぐ脇にいる男子学生も同じ言葉で叫んでいる。
しかし、生れて初めて見る馬に興奮し切ったシロの耳にはどんな叫びも届かない。
「あの馬鹿が、・・・・・・！」
学生がまた怒鳴る。ただ、その声にはもう、力も迫力も消え失せている。
目の前に繰り広げられる直線的な追撃。それにようやく気付く巨大な身体の農耕馬。それでも、肉薄する背後の相手の素性を確認する余裕のない農耕馬は、一目散に自分の馬小屋に駆け戻る。

しかし、シロの追撃運動はそこまで。入口の閉ざされた馬小屋の前にくると、その馬は思い余って背後を振り返る。そうして、自分をそこまで追い掛けてきた相手が普通の犬だと知ると、今度は二つの前足を高く持ち上げ、二つ穴から荒々しい鼻息を周囲に飛ばして怒り始める。

それでも、馬の怒りは収まらない。前足を地面に下ろした当の馬は追撃の立場を変えて、新たな疾走を開始する。

猛烈な雪煙が上がる。馬の怒りを代弁するような蹄の音が周囲に轟く。その興奮した馬に追われて、シロの逃走が始まる。だが、既に意気消沈した状態のシロには最早、背後に迫る相手の追撃をかわす余力も残っていない。

シロは突然、向きを変える。その先には、まだ生れて半年の息子を抱えた私がいる。

「シロ、駄目だ。自分の始末は自分で付けろ！」

私は叫ぶ。ここでシロに代わって馬などにやられてしまうと、私と息子の命さえ風前の灯。その上、犬のシロの代わりに、我々親子が犬死するようなら、神も仏もありはしない。

幼い乳飲み子を抱きしめる。ただ、それは虚しい私の行為。気が付いたとき、すぐ目の前にあの農耕馬が立ち塞がり、最後の一撃を加えんと、鼻息荒く待ち構える。

一瞬頭を下げ、目を閉じる。最早逃げる力も、その意志すらも棄てている。

「おーい、おーい。」

どこか遠くから声が聞こえる。

「おい、止めなさいってば。こっちに戻っておいでよ。」

誰の声か分からない。ただ、その言葉の意味だけなら、どうにか理解も出来そうだ。

恐る恐る目を開き、頭を上げて前を見る。シロはすでに逃げ去り、背の高い、身体の逞しい農耕馬がそこにいる。

（脅かして済まなかった。すべては私の責任だ。）

声にこそ出さないが、私の心境はまさにその言葉通り。すべての雑念を棄て、心の底から相手に謝る。

間もなく、私達は農家の主婦によって馬から解放された。それはしかし、楽しかった筈のソリ滑りを続行することにならなかった。

「どじ、シロの馬鹿野朗、・・・・・・!」

少し離れたところから、学生の最後の叫びが辺りに響く。

大学紛争の時代　その六　自宅への招待

昭和四六年の十一月、札幌の街に冬季オリンピックのテーマソングが流れる。男女二人の歌手が歌うとても美しい曲で、多くの人が自然に惹かれていくような素晴らしい歌だった。

その歌の世界と同じように、札幌の街は華やかな雰囲気に包まれ、色鮮やかな女性の服装がその冬の街をさっそうと行き交う姿もよく目にした。

だが、そうした晴れやかな世間とは裏腹な世界も、札幌にはあった。それは長引く紛争や闘争で荒廃しつづけた大学の構内。すべての門が破壊され、すべての扉が壊されてしまった物悲しい世界がそこにあった。

私の周囲にも、大学解体を叫んで奔走していた学生達がいた。それがやがて熱意を失い、一向に姿も見せない。かといって、大学がすぐ本来の賑やかな世界に戻るという訳にもいかない。

そうした中で、私の研究室では管理を続けるシマリスやウサギが無事生き残

り、わずかに残った女子学生や女性の教職員にとても慣れていった。その結果、毎朝出会う度に彼等はまず、動物達の様子を互いに話し合うことから、日々の学習や仕事を始めるようになっていた。

馬騒動を起こしたシロは元々、学生達に愛され、シロの方も学生達が大好きだった。だから、廃墟の中で学生の姿が希薄になった状況をシロはとても悲しんだ。とくに大学構内に人気がなくなる夜、シロは私に居場所がないと訴えてくる。そこで私はシロを頻繁に自宅へ誘い、我家で泊まるような日々をやがて迎えた。

通常、車で一緒に帰宅するシロを私は塀を回した裏庭に導いた。ところがそんなある日の夕方、私は気紛れに我家の家の中に誘ってみた。すると彼は素直に従い、玄関から居間に入った。

その姿を見て幼い娘が喜び、次に台所から首を出した妻も喜んでいる。

（まあ、こんな日もあっていいだろう。）

そう思いつつ、私自身も家の中で一晩シロと過ごすことの楽しさを頭の中で考えながら、家に入った。ところが、シロの発想は別にあった。彼は私の指示を単なるルールの変更と受け止めていたのである。

玄関からさっそうと居間に入ったシロは、家族に簡単な挨拶を済ませると、無造作にその部屋を通り抜け、ベランダのガラス戸へ向う。それから一瞬の躊躇もなく、シロの大きくて頑丈な頭がベランダのガラスに衝突する。しかし、シロはまったく怯まない。

ゴツンにバリバリ、そしてガシャン、ガシャン。連続するそれらの音を後に残し、本人の身体はいつもの暗い裏庭へと消えて行く。

私はベランダの開き戸を見詰める。そこにはシロが通り抜けたばかりの丸い穴がある。サイズならバレーボール、少々のギザギザに目を瞑れば、完全とも

いえそうな円形の通路がそこにある。
「シロの馬鹿やろう！」
私は叫ぶ。叫びながら、
（ひよっとしたら、これは自分の軽率さに原因がありそうだ。）
と思う部分も少なくない。
ともかく、今は時期が時期だから、開いてしまった穴はすぐどうにかしなければならない。ちょっと考え、有り合わせのダンボールをそこに貼り付ける。
親子三人とモクの夕食が始まる。だがやはり、晩秋を迎えた北海道の夜は寒過ぎて、妻の用意した夕食の味が分からない。

大学紛争の時代　その七　白い屍

それから二週間後、何時もの帰宅時間を迎えて、私は研究室の窓からシロに呼び掛ける。
「おい、シロ。帰る時間だから戻ってこーい。」
大抵なら、その声を聞くとシロの姿が私の前にすぐ現れる。しかし、何故か普段の話が今日は違う。もう一度大声を出し、当然の結果を期待する。
シロはやはり戻らない。そこで、シロの恩人となった大学院生に聞いてみる。
「シロの姿見なかった、・・・・・・？」
「午前中まで私の脇にいたんですが、その後どうしたのか、アイツの姿は見えませんね。急ぐようでしたら、周りを探してみましょうか？」
「いや、所詮はアイツのことだ。ここは放ったまま、僕は帰るよ。」
そう言いながら、私は車に乗って大学を離れた。ところがその日を境に、私の前にシロの姿が現われることはなかったのである。

十一月後半から十二月。そして暮から正月へと時は足早に通り過ぎていった。その間も、問題のシロと不思議な縁で繋がる私達二人は、頻繁に探しつづけた。

やがて二月、とうとう札幌冬季オリンピックの開催される日を迎えた。新聞やテレビの関係者、あるいは世界から集まった冬のアスリートばかりでなく、多くの日本人や外国人が札幌を訪れ、あのテーマソングの下で、かって経験したことのない華やかな雰囲気が街中に溢れていた。

しかし、少なくとも私達二人だけは、その波に飲み込まれることがなかった。日々、シロのことを話し合う度に腹が立ち、虚しさと寂しさが二人の心を曇らせる。

そして四月、雪の消えた構内では若者達がまたキャッチボールに興ずる時期を迎えた。ある日、私もその仲間に入り、構内の芝生の上で野球に興じた。

私は外野を守り、誰かがボールを打った。その球が私の頭を越え、研究室の床下に飛び込んだ。そこで右手のグローブを一先ず脱ぎ捨て、無理を承知で、床下に潜り込む。

四月の屋外の光は明るく輝く。しかし、古くて大きな建物の床下では、その明るさも届かない。仕方なく半身を外に残し、私は手先の感覚でボールを捜す。とその時、私の右手の指先に、ある独特の感触が伝わってくる。

（シロ。これはシロに違いない、・・・・・・！）

瞬間のこととはいえ、私の確信は変わらない。ただ、指先に残る氷のような冷たさがもたらす生々しい感触が、現実の儚さと虚しさを伝えてくる。

取りあえず、ボールを野球仲間に投げ返し、改めて床下からシロの死体を引きずり出す。

外傷がないのに、手足が伸び切ったまま冷たく横たわるシロ。全身を覆う埃、あの白くて長かった毛並みさえ、擦り切れたボロ雑巾のように汚れている。

（あのシロなら、餓死することも凍死することも考えられない。じゃ何故、シロはここで死んでいるのか、・・・・・・？）

目から涙がこぼれる。シロの身体に乗せた手が冷たい。

（犬同士の喧嘩が原因で死んだのか。それとも、誰かのゲバ棒で殴られたのか、・・・・・・？）

しかしそれなら、身体全体に傷がなく、黒ずんだ血の跡がないのはどういう訳だ。ぼんやりとした頭の中で、私は思い巡らす。そして、急に思い出した。

冬季オリンピックが迫り、治安上の配慮から市内全域に毒饅頭を
配布します。もし、普段から飼犬を放置されているご家庭があり
ましたら、速やかに鎖に繋ぐか、犬小屋で飼うようお願い致します。
尚、この件について後日の苦情は受け付けません。

札幌市環境衛生部

その日付を私は記憶していない。ただ、これがある北海道の新聞記事に掲載された公示の一つだったことと、テレビやラジオの放送でも繰り返し報道されていたことはいまだ記憶に蘇る。

改めてシロを見下ろす。その哀れな姿に、行き場のない憤りが込み上げる。

昭和四七年の四月末、遅い山桜の季節が間もなく札幌市内にもやってくる。

愛犬モクの世界　その一　二者選択

普通の犬は一歳前後に最初の発情期や出産期を迎える。その時期は犬の種類によっても、また日常の栄養状態によっても大きく変わるようだ。

我家の愛犬モクの場合、一歳前後で迎えた最初の発情期の折り、本人が自分を人間の子供と誤解していたせいか、牡犬と実際に交尾することもなかった。

確かに、最初の発情期でモクの様子は一変した。私達夫婦の言葉を聞かず、終日外を歩き回り、見知らぬ犬達に突然興味を示しながら、彼等と戯れることに熱中する時期もあった。

しかし、その時はそれがモクのすべてだった。発情期と思われる時期さえ終わると、モクは本来のモクに戻った。

時の流れと共に、我家の雰囲気も変わった。特に二人目の娘が生まれたり、妻の母親が突然の事故で死んだりした後など、私達はまだ若い人間として、悩み苦しむ時間も長く続いた。

そんな時、私達はモクの存在に余り関心を寄せなくなった。精々、日々の餌と水くらいは忘れなかったが、彼女の動きに特別な関心をもつそれまでの習慣など、どこかに消え失せていた。

三歳を迎えるころ、モクの口髭に白髪が目立ち始めた。そのころから、モクの豊かな表情や動作に、陰りも見え始めた。普通の飼犬に戻った、という表現もあるかもしれない。

そして四歳の春、モクに待望の仔犬が産まれた。すると、最初はぎこちない母親だったモクも、一夜にして立派な母親になり、ミルクを与えることはもとより、お尻の始末もごく自然に始めるようになった。

それから一ヶ月、ある日私はモクに悪戯を仕掛けた。お腹を空かしたモクの

目の前に美味しそうな餌を置き、モクにいった。

「これ食べる。それとも、これから車に乗って僕達と海まで遊びに行こうか。どうする、・・・・・・?」

その言葉を背後で聞きながら、モクは最初に自分の餌を食べようとした。しかし、私が車にエンジンを掛けると、モクは自分が今、二者択一の状況にあることを知ったようだ。それはまた、自分の乳飲み子を放置するかどうか、という問題でもあった。

私は意地悪く、モクの決断を迫った。そうすると先ず、モクは餌を棄てて車に乗った。だがその途端、モクは車を棄て、急いで子供達のところに駆け戻る。

私は車のエンジンを噴かした。それは第二段目の脅迫だった。するとまた、モクはあたふたと車に乗り込み、後部座席に乗り込んできた。そこで私はもう一度いった。

「モク、餌はともかく、あのか弱い仔犬達をこのまま家に放置して置いてもいいのか。海まで行って戻るとなると三時間は掛かってしまう。そうしたらお前の大事な仔犬が何頭死いんでいるか、分からないぞ、・・・・・・?」

私はそう脅かしながら、相手を運転席から振り返る。モクはしかし、私の言葉を無視するかのように、頭と身体を丸めたまま、車の後部座席に座って返事をしない。

一時間後、私達は日本海の海辺に降り立つ。それからすぐ、野球のボールを使い、犬と人間の戯れを始める。

それは人間と一緒に屋外に出掛けた際のモクが常に好んだ遊びの一つ。ただ、その時だけ、モクの様子は明らかに違う。

砂浜の上で、私が先ずボールを投げる。それを足元から走り出したモクが追い掛け、ボールを咥えて戻ってくる。こうした情景は世界中のどこでも見受け

られる有り触れた人間と犬の遊び。普段のモクなら、その遊びに飽きることを知らない。

三度目、モクはボールこそまた取りに出掛けるが、どうやら戻ることは止めたようだ。その替わり、モクは近くの砂丘に停めた私の車へと戻っていく。

（そうか、それでこそお前は母親だ、・・・・・・！）

そう考える私は馬鹿で、愚かな人間の一人。己の横柄で勝手な優越感の犯罪性にすら気付いていない。

愛犬モクの世界　その二　スケープ・ゴート

それから一ヵ後、モクの仔犬達がギャングエージに入る。仔犬達の動きも遊びも激しさを増し、日に日にその度合いを増幅させる。

そんなある日、大学の帰りに私は街中の植木市場に立ち寄り、木蓮の苗木を一本手に入れた。値段は千五百円、貧乏な私としては大変な奮発をした買い物だった。

自宅に戻り、私は裏庭の隅にその木蓮の苗木を植えた。その時ふと気になり、周りを取り巻くモクと仔犬達に警告した。

「おい、皆。この苗木を喰っちゃいかんぞ。高い金を出して買ったんだからな。もし誰かがこの苗木を喰ってしまったら、そいつは死刑だ。本当だぞ、忘れるな。」

私は本気だった。

（この苗木だけは守りたい、・・・・・・！）

その思いが、モクや仔犬達に強い言葉を使わせた。

翌朝裏庭をのぞくと、木蓮の苗木は無事だった。それは二日目、三日目と続

き、私は自分の強い言葉が仔犬達のこころにまで届いたと考え、もう気にすることもないのだと勝手に決めてしまった。

ところがその直後、大学から戻った私の前に、一本の哀れな棒が立っていた。それは正しく、あの木蓮の苗木だった。

「誰だ、これをやった犯人は、・・・・・・?」

よく考える暇もなく、私は叫んだ。そうしながら、私はモクを呼び付けた。

「おい、モク。誰が犯人か知らないが、お前なら知っている筈だ。すぐそいつをここに連れて来い。」

私は自分の高ぶる感情に任せて、モクに命じた。それと同時に、モクは視界から消え失せ、私だけが悔しい虚しさを抱ええながら、呆然とその場に残った。

ふと気が付くと、モクが再び私の元に戻ってきた。そして、そのモクの前には母親に追い立てられてやってきた一匹の仔犬の姿があった。

正直なところ、私は目の前の成行が信じられなかった。

（主人の要求に応じて、母犬が自分の子供を危険にさらす。そんなことが一体全体本当に有り得るのか、・・・・・・?）

自分の直前に吐いていた言葉とは裏腹に、私は不思議でならなかった。

だが、目の前に戻ったモクとその無邪気な仔犬の姿を見たとき、私は自分の一方的な愚かさを悟った。

「モク、もういい。話は済んだ。」

私の心はその時、深い感動に満たされていた。

変貌を遂げる札幌の街

北の都札幌の市街地や郊外の景観は札幌オリンピックを境に突然の変貌を遂

げた。その端的な例を挙げれば三つある。

一つは札幌市の抱える人口。私が大学に入学した昭和三五年当時、その数は五十万余りと言われた。しかしその後、次々に周辺の市町村との合併が起こり、札幌オリンピックが開催された昭和四十年代には百万都市になり、市街地の範囲も東西南北を問わず、飛躍的に広がった。

二つ目は札幌市一帯の交通網と道路の変化。私が学生として暮らし始めたころ、多くの市民は市電に頼り、通勤通学ばかりか、日常の買物の際にも、市民はよく市電を利用する生活を送っていた。

それが札幌オリンピック開催を契機に変わった。その最大の原因は札幌市を南北に縦断する地下鉄の開業と、それに合わせたバス路線の拡張や道路網の発達だった。

たとえば私の通学の場合、バスの終点は遥か南のオリンピック会場へとまず伸び、やがて市バスが地下鉄南北線へと変わっていった。それと同時に、我家を取り囲む道路のすべてが片側一車線から二車線へと変わり、砂利道が見事なコンクリート道路へと変貌した。

そして三つ目の驚異的変化は庶民の生活を守る家。これも同じ昭和三十年代で見れば、辺り一面が戦前に建てられた古い木造の平屋か屋根の低い二階建て住宅。窓は小さく、寒さを防ぐ手立ての少ない家が市街中心部にも広がっていた。

それが四十年代、古風で貧しい日本式住宅が一気に取り壊され、綺麗で清潔感のある洋風建築の住宅が次々と建てられ、札幌市内の様相を変えていった。

ところが、札幌市内がそうして近代化されると、一部の市民は棄て犬や捨て猫の処理に困った。その結果、札幌市の近代化とまったく無縁だった私の通う大学構内が急に注目されるようになり、そこが第二の野犬センターとして注目

されるようになってしまったのである。

牝犬アカ

当時の大学構内は惨憺たる状態にあった。大学紛争の煽りで多くの建物の扉と鍵が壊され、大学の本部事務局も、そして最も大事な大学の中央図書館ですら、そうした棄て犬や捨て猫の棲家に変わった。

私も研究に使う他の動物に加えて、北海道犬の仔犬を何頭か研究室に持ち込んだが、農耕馬追走事件で馬鹿野朗とシロに怒鳴った学生もそこで一匹の野良犬を飼い始めた。

学生がアカと呼んで親しんだその犬は牝で、茶色の長い毛並みや大きく垂れた両耳の特徴から、セッターの純系か雑種のように思われた。

今でこそ札幌市内の大学で教授を勤めているが、その学生は当時、大学の構内で多くの野良犬と戯れ、アカの場合は特別に生活すべてについて心を配っているような、どちらかというと、気の優しい男だった。

それはともかく、牝犬のアカは順調に育った。その上、アカは大人になると繰り返しよく子供を産んだ。あるときは三匹、またあるときは五匹と、アカは本当に産みつづけた。

ある日、私は当の学生に聞いたことがある。

「おい、君。アカの子供の処理はどうしてる?」

すると彼はいった。

「先生、アイツはねえ、とても生命力の強い犬なんですよ。それにアイツの産む仔犬達には必ず貰い手が付いて、心配など必要がありませんよ。」

半信半疑、私はその言葉を聞いた。ただ、自分の目でその事実を確認したい

という思いも心に浮かんだ。

脇道一つを挟んで、研究室の向かいに学生専用のテニスコートがあった。その一画には古い控え室もあり、多くの学生が騒がしく出入りを繰り返していた。

ある年の春、アカはそこで何度目かの出産と子育てを始めた。そしておよそ二ヶ月が経ち、仔犬達はギャングエージの時期を迎え、アカの仔犬が欲しいという人も次々に現れるようになっていた。

そんなある日、私はアカと子供達の様子を見に出掛けた。そこに、新たな仔犬の受取人が現れ、私の目の前で一頭の仔犬を連れ去った。

その状況の中で、私は母親のアカの様子に注目した。

（アカは一体、自分の子供が連れ去られるのをどう思っているのか？）

私はそれが知りたかった。しかし、そんな人間の関心を他所に、アカは淡々と自分の子供を見送り、それを阻止しようとしたり、あるいは追い掛けるようなことをしなかった。私の目に映った印象を述べればアカはそのとき無頓着であると同時に、母親としては冷淡でもあったと記憶している。

その印象は印象として、私には何か割り切れない思いが最後に残った。

（何故、アカはあれほど冷淡でいられるのか？）

不思議であり、不可解でもあった。その不可解さは今でも、私の心の奥に残っている。

（牝犬アカにとって、自分の子供を産み育てるということと、その子供を時期を見て簡単に見放すということが、心の中でどう組み立てられているのか？）

この問いに私はまだ納得する答えを見出していない。

スキー場で拾った犬

大学紛争が佳境に入るころ、我国ではいわゆる四大公害裁判が続いていた。その反面、国民の経済水準も確かに上がり、私のような大学の助手を勤めるような人間にも、ささやかな生活上の余裕も生まれた。

結婚後十年、私達夫婦の間にはすでに三人の子供が生まれ、満足のいく肝心の研究こそまだ暗中模索の状況ながら、家族生活を楽しむ時間も生まれてきた。

そんなある冬の一日、私達は買い揃えたスキーを抱え、近くのスキー場へ出掛けた。天気は快晴、しかも無風。それは最適のスキー日和だった。

家から西へ二キロ、そこに地味で小規模のスキー場がある。札幌では一番古いスキー場だったが、華やかな時代の幕開けの下では、余り人気のないスキー場でもあった。

正午近く、私達はスキー場に到着。朝から喜び勇む子供達はすでにその前から車の中で騒いでいる。いつもなら暗い気分を隠さない私だが、その日に限って、子供達のはしゃぐ声が心にくすぐる。

（人生、こんな日もあっていいさ。）

そんな考えが、頭の片隅を過ぎって浮く。

スキー場特有の音楽が辺りに響く。スキー場も狭いが、駐車場はもっと狭い。正規の駐車場はすでに満杯。仕方なく、坂道の途中に車を停める。

ドアーを開き、子供を降ろし、続いて荷物も降ろす。

子供達はまだ小さい。だから一人一人にスキー靴を履かせてやり、金具もしっかり取り付けてやる。

私も大学の先輩から譲り受けた古いスキーを履き、元気に明るく声を出す。

「さあ、いくぞ、・・・・・・!」

とその時、背後から妻の声が聞こえる。
「貴方、あれを見て。大きな犬が車に乗り込んでいるわ。」
折角の気分に釘を刺される形で、私は後ろを振り返る。そしてそこに、一頭の大型犬の姿を認める。
黒と白と灰色の混ざった長い毛並み。大きく垂れ下がる二つの耳。口を覆う上唇。イングリッシュとかアイリッシュと呼ばれる純系のセッターがそこにいる。
一度開けたまま閉めるのを忘れていた助手席のドアー。その助手席に陣取る大型の犬。妻の言葉に偽りはない。
急いでスキー靴を脱ぎ捨て、その場に戻る。妻が朝から作っていた家族五人分の弁当が些か気に掛かる。
「おい、コラ。何を考えている。すぐ降りるんだ！」
開いた車のドアーに片手を掛け、助手席の相手を睨み付ける。それでも、その犬は車から出る気配すら見せようとしない。
よく見直すと、確かに巨体の一部が助手席からはみ出している。その上、太い尻尾が激しく左右に振れていて、身体一杯に歓迎の意志を現してもいるようだ。
「おい、場所を間違えるな。これは私の車で、お前の主人の車じゃないぞ。」
私の声から、直前の怒りがもう消えている。それでも、この犬は車の外に出さなければならない。
「頼む、出てくれ。車の窓を閉めて、鍵を掛けるんだ。」
だが、相手の様子は変わらない。懸命に打ち振られる尻尾、特徴的な口元から溢れる唾液。最初の姿勢を変えてこちらに向き直り、右手と左手が順次交代して私の身体を叩くこともする。

それは勿論、悪意とは言えない。その位のことは私にも分かるし、感覚的にも伝わってくる。

しかし、私にはその犬の意志をここで認めたり、受け入れる考えは毛頭ない。なにより、その犬に車から出てもらわなくては、おちおちスキーも楽しめない。

「おい、頼むよ。早く出るんだ。」

突き出された手か前足を両手で掴み、その犬を力尽くでも引き摺り出そうと試みる。相手にまったく悪意が感じられない以上、たとえそうしていても、私に不安は浮かばない。

ただ、そこで問題なのは双方の体力さ。中学、高校、大学を通じて力のいる仕事もスポーツもしていない私の腕力や体力など到底、相手の犬の足元にもおよばない。

数回の綱引きで私は汗をかく。その前に、遊びを楽しんだ相手がいる。

自分の姿勢を変え、振り返って家族の様子を確かめる。

歩き出して間もなく転んだ幼い息子の姿が見える。その脇に、こちらを見ながら微笑む上の娘と妻がいる。誰一人脅えたり、困ったりしている様子は窺えない。というより、私と犬との格闘を楽しんでいた、という印象が否めない。

その姿や様子を見て、私もクスリと笑みがこぼれる。緊急事態打開の意図も、どうやら心の外に逃げ出してしまったようだ。

再び姿勢を元に戻し、一言相手に言葉を残す。

「じゃ、そこにいたいなら居てもいい。ただ、車の中を齧ったり、家族の弁当を食べるのだけは許さないぞ。」

その言葉を合図に、助手席のドアーを開けたまま、私は家族に向って歩き出す。少々の危惧と不安、それを敢えて握り潰し、子供達が朝から楽しみにしていたスキーのために、頭の中を切り替える。

二時間後、子供達を促し、スキーを脱がせて車に戻る。しかし、状況は最初のまま変わらない。唯一変わったものと言えば、問題の相手が今やぐっすり眠り込んでいること。

手の届く所に集まった家族が犬と私を交互に眺める。その意図なり意味は当然、私にも伝わってくる。

「でもな、この犬に助手席を取られたら、運転席のパパはともかく、お前達の座る場所がないぞ？」

すると妻が笑顔で言い返してくる。

「パパ、それは大丈夫。一番下の娘を私が抱けば、後部座席に皆座れるわよ。」

言われてみれば、それも頷ける。しかし、本当にそれでいいのか。

私の車は定員五人の小型車。そこにもう一人大型の犬を乗せれば、問題はないのか。お巡りさんに怒られたり、摑まってしまう危険性はまったくないのか。ふと考えてはみるが、正しい答えなど分からない。

（まあいいか。適当な言い訳も出来そうだし、・・・・・・。）

そんな考えも頭に浮かんで、最後の決断を下す。

「じゃ、皆いいかい。この犬を一旦連れて帰り、来週の日曜日にもう一度ここに来て、放してみよう。多分、この近くに飼主の家があれば、きっと自分でその家に戻るだろうから、・・・・・・。」

即座の全員一致、誰の顔にも喜びが溢れている。

帰宅後、家族会議を開いて、その犬に大ちゃんと命名。すぐ先住者のモクや他の犬に紹介して、裏庭の住人に加える。

牡犬大ちゃんの体格は愛犬モクの三倍は超える。実に大きく、逞しそうな身体がベランダの窓越しに見える。ただその反面、大ちゃんの性格はとても優しく、誰にでも愛嬌を振り撒く姿がいじらしい。

犬の世界にも先住権があるのか、相手の肩口にも自分の頭が届かないモクの態度の、横柄な様子が窓越しに見える。それを妻が見て、

「犬の世界って分からないものね。あのふたりの姿を見てよ。小学生が大学生相手に威張っているわ。」

それはすでに分かっている。だから、腹の底から込み上げる笑いを、私も今、じっと抑えて堪えてもいるのだ。

約束通り、次の日曜日はまた朝から家族揃ってスキー場に直行。助手席に同乗していた大ちゃんも、スキー場では子供達の後を追うように車を離れる。しかし何故か、大ちゃんは我家の家族と離れない。子供達のスキーを追うか、私や妻の元に戻って甘え続ける。

「どうしたもんかなあ。これじゃまた、大ちゃんは我家に戻ってしまうぞ?」

「いいじゃないの。大ちゃん本人がこうしてそれを望んでいるのよ、・・・・・。」

「それはそうだが、この犬を今札幌市内で買うとしたら、僕の給料の二か月分だぞ。そんな高い犬を飼主が簡単に放棄してしまうかなあ、・・・・・?」

「だって、大ちゃん自身がこうして望んでいるのだから、後は捜索願の有無を警察か保健所に問い合わせればいいことよ。問題はないわよ。」

言われてみれば、妻の言葉に一理ある。しかし、これですんなり話がきまるようなら、普段の夫婦の立場が逆転しているのはどうしたことだ。

二度目のスキー場から戻って、我家の内外ではすべてが当然の如くつづいている。ところが二週間目の朝早く、我家で暁の脱走事件が起こってしまう。

裏庭がやかましい。多分、近所の野良猫か犬が我家に近付き、それを先住権やテリトリー意識の強い犬達が本気で怒って、騒いでいる。

近所の手前、その騒ぎが気になった私は、ふと外に目を向ける。と、その時、私の目に映った光景がある。

雪の中に半分埋まった塀の一部から、一頭の犬が飛び出す。続いて二頭目、三頭目が飛び出し、最後にあの大柄な大ちゃんまで裏庭から飛び出していくのだ。

（おい、止めろ！）

私は頭の中で叫んでいる。しかし、目の前に起こった事態は、すべての犬の脱走と共に一旦の終結を迎える。この家の主を自認する本人にとっても、それはどうにもならない自然の成行。後は人間を巻き込んだ大きな事故が起こらないことと、脱走した犬達の無事帰還を神に祈る他仕方がない。

その夜遅く、我家の犬が期待通り次々と帰還する。その後を追うように、大ちゃんの姿もベランダの前に戻ってくる。

その姿がいじらしく、妻も私もベランダのガラス戸を開けて大ちゃんに手を伸ばす。と、その瞬間だった。

伸ばした掌に、何かがベトリと粘り付く。そこで慌てた私は、相手の身体を強く引き寄せ、室内灯の下で確かめる。

大ちゃんはまだ、尻尾を振るだけの余力は残っている。しかし、その頭からは血の流れが止まらない。

よく見ると、大ちゃんの頭に縦に割れた傷がある。妻の手を借り、その傷に消毒液を流し込む。それから脱脂綿をその傷の部分に当て、更なる出血を抑える。

きちんと座った状態で、大ちゃんは私の荒治療に耐えている。まだ付き合って間もなく両者の関係を考えると、そんな姿や態度も切なく、いじらしく思える。

ともかく大ちゃんの血止めを終え、ベランダの戸を閉めて普段の生活に戻る。

翌朝、まだベッドの中にいる私の耳に、妻の叫び声が聞こえる。

「パパ、起きてよ。大ちゃんの様子がおかしいの！」
私は子供を足元に残して、ベッドを飛び出す。それからベランダのガラス戸に顔を付け、裏庭全体を見ようとする。しかしもう、その必用もなさそうだ。
一メートルを越える積雪。その真ん中に一頭の大きな犬が倒れている。それはいうまでもなく、あの大ちゃんの姿。だが所詮、その姿には死後硬直の臭いがする。
（駄目だ、もう間に合わない！）
そう頭の中で思うと同時に、
（誰だ一体、この素直でいじらしい犬を殴って殺したのは、・・・・・・！）
と、口の中で怒鳴っている。
時間は戻らない。後悔も先に立たない。ただ、我家の庭に倒れ伏した大ちゃんの姿を見ていると、虚しさだけが心を占める。

愛犬モクの最後

私の拙い人生に一大転機を与えてくれた愛犬のモク。その十年余りの一生において、彼女が私に教えてくれたことは数知れない。
私達家族も、モクを愛した。特にモクが九死に一生を得る形で我家の飼犬になった当時からの数年間など、私達家族にとってこそ、牝犬のモクはなくてはならない存在だった。
しかし気が付くと、私は自分の研究のテーマ探しに熱中していた。妻は妻で自分の母親の急死問題や、次々と生れてくる自分の子供の世話に追われ、モクに対する世話や関心の方がおろそかになっていた。
慌しく過ぎる日々、あれほど利発だったモクの姿がどんどん変わっていた。

モクはもう私達家族の顔を見上げることがなかった。目の光が失せ、活発な動きも姿を消した。

一日中、モクは狭い自分の犬小屋に閉じこもることが多くなった。食欲もすっかりなくなり、毎日食べているのかどうかさえ分からない。それは当然、私達人間の側に問題があったのだが、それに気付くような私達ではなかった。

それは夏の初めのある日曜日だった。何気なくふと裏庭の中を見ると、ベランダの台の上にモクの姿がある。ところが何故か、モクの様子がおかしい。

急いでベランダの戸を開ける。それからモクの身体の頭から尻尾の先まで眺めてみる。すると、座りたくても座れないモクの事情が飲み込めた。

モクは生来、小型の犬であった。ところが、そのきゃしゃな身体のお尻の周囲に、妙な腫れ物ができている。

気になり、サンダルを履いて庭に下りる。すると、モクの身体に触れるより早く、むっとするような悪臭も鼻に付く。

「モクどうした。そこ痛むのか？」

私はありきたりの言葉を掛ける。しかし、その返事の替わりに、モクは睨むようにこちらをじっと見上げる。

その視線をかわし、もう一度、患部を見直す。確かに、大きな腫れ物が目の前にあって、そこから膿みのような液体が流れ出しているようだ。

「・・・・・？」

私は考える。自分がモクに今何をすべきか。何をしてやれるか。ところが、本人のモクは私の心配をあざ笑うように、自分の小屋に戻ってしまう。

その背中には反抗の色が窺える。もしモクが言葉を話すなら、

「今ころになって気付くなんて、いい加減にしてくれよ！」

という棄て台詞も聞こえてきそうな気がする。

それから十日後、長女の求めで再び裏庭に眼をやる。すると、モクの背中の一部が犬小屋の入口に見えてくる。

「どうした？」

私がまだぼんやりした頭で娘に聞くと、

「パパ、あれじゃあひど過ぎる。生殺しみたいじゃない！」

といって私を睨む。それを横目に、また玄関からサンダルを取り出し、裏庭に入る。

無理を承知で、犬小屋からモクを呼び出す。それから相手を地面に横たわらせ、患部を詳細に調べ直す。

今や、野球のボールほどになった球形の腫れ物。指で触れると、なかなか硬い。その上、その表面の二、三ヶ所に穴が開き、そこからあの悪臭に満ちた膿がこぼれ出ている。

獣医に出掛けて今更どうにかして欲しいと言ったところで、もう手遅れは目に見えている。

後ろを振り返る。そこに娘の怒りに満ちた顔があって、父親の私に、どう責任を取るのかという姿で、決断を求めているようだ。

そう言われなくても、すべての責任が自分にあることを十二分に承知している。ただこの期に及んで、私にできることはもうなさそうだ。

「モクをここまで放置してきたことも、こんなにひどい姿にしてしまったことも、すべての責任は私にある。その無責任さの延長で、私はモクを眠らせるよ。それからその後、モクの亡骸を静かに葬ってやりたいが、手を貸してくれるか？」

仕方なく、私は娘の顔を見ながら話し掛けた。するとすぐ、長女の二つの目から大粒の涙が湧き出し、言葉なくうなだれてしまった。

その姿を見ながら、私はふたりの相手に両手を付いた。一人は子供の中で一番モクを愛しつづけた長女。そしてもう一人は言うまでもなく、目の前に横たわる愛犬のモクだった。

ジステンバーの恐怖

昭和五十年代の前半、私は北海道犬の習性や特徴を知るために、一腹六頭の仔犬を買い入れた。それと同時に、札幌市内の動物商を通じて東京からドイツシェパードの仔犬も買い入れたことがある。

当時、大学に助手として勤める私の月給が一五万円余り、一腹六頭の北海道犬の値段は合わせて六万円だった。そして東京近郊から空輸されてきたドイツシェパードの牝一頭の値段も六万円だったと記憶しているが、一体どこからそんな金が出てきたのか、いまもって分からない。

時期は早秋、札幌市内に雪があったかどうか記憶にない。

手元に届いた北海道犬の仔犬はごく普通のありふれた印象を与えた。その反面、東京から送られてきたシェパードの仔犬は毛足が長く、とても品格のある犬だった。

そのせいかどうか、私の家族はその仔犬を特別可愛がり、当時米国映画のスターとして名をはせたグレース・ケリーの名前からグレースと名付けて遊び始めた。

私の目から見ても、グレースの姿や動きには底知れぬ魅力があった。才色兼備とはこの仔犬のためにある言葉だと勝手に思った記憶もある。

ところがそれから数日後、我家に衝撃が走った。グレースの身体が一気に弱り、吐く息や呼吸が乱れ始めたのだ。

それには家族も悲しんだが、私も途方に暮れてしまった。取り合えず近所の獣医に出掛け、助けを求めた。しかし、獣医の言葉は冷たかった。

「ああ、これはジステンバーですね。仔犬がこれに掛かると、死亡率がとても高くなります。取り合えず注射は打っておきますが、期待しないで下さい。」

仕方なく、私はその仔犬を抱いて自宅に戻った。それから急いで毛布を取り出し、獣医の頼りない指示に従って、仔犬の身体を懸命に暖めた。だが、それはやはり、気休めにすぎなかった。

三日後、才色兼備の仔犬があっけなくこの世を去った。死を目前にしながら、倒れたまま前足で我家の子供達に触れようとする愛らしさだけがその跡に残った。しかし、事態はそこからさらに悪化の一途を辿った。

我家の仔犬達はすべて寝食を共にしていた。食べては遊び、遊んではまた食べる。そのすべてにおいて、彼等は皆いつも一緒だった。

ところが、グレースが多分空輸された際に持ち込んだと思われるジステンバーはまだ十分な体力のない仔犬達にとって、悪魔の伝染病だった。誰かがジステンバーにかかれば、その周囲にいる仔犬のすべてもジステンバーにかかるといわれるほど恐ろしい病気だった。

それが我家の場合も同じ結果をもたらした。グレースが倒れて間もなく北海道犬の仔犬にも変調が現れ、次々と倒れていった。

悲しかった。悔しくもあった。それにジステンバーに翻弄される仔犬達の姿を見ていると、哀れで仕方がなかった。

それでも、ドイツシェパードのグレースに比べて、北海道犬の仔犬にはこの伝染病に対する抵抗力まだ残っていた。

グレースが死んで一週間、六頭の仔犬はまだ自分の足で歩くことができた。それからさらに一ヶ月、六頭の仔犬の内三頭の牝が弱り出した。鼻水を流し、

遊んだり楽しく走り回る力を失った。そして札幌に雪が降り始めて間もなくのころ、その三頭も死の世界に旅立ち、最後に牡犬の三頭だけが生き残った。

遥かな過去に起こったこの記憶を思い出すと、幼い命の哀れさやはかなさと共に、当時も今も変わらない自分という人間の無力感に辿り着く。

救世主アンディー　その一　貧相な犬

ドイツシェパードの仔犬グレースをジステンバーで失った直後、私は仲介業者の動物商と掛け合った。

「あの犬が伝染病のジステンバーで死んだことは獣医が証明している。しかも、東京から航空便で送られてきた直後に死んでしまったのは、お宅の責任だろう。だとしたら、至急次の犬をもってきて欲しい。しかも、伝染病の危険がないやつをね。」

すると、札幌市内で小さな店を構える動物商がいった。

「確かに、運搬手段として航空便を選んだのも私ですから、責任を取れといわれれば、返す言葉もありません。しかし、見ての通り、私の店はこの程度のもので、全額負担で新たなシェパードを仕入れるとなると、商売に響きます。どうですか、あと前回の半額に当たる三万円だけ払ってくれませんか。そうしたら、私も残りの半額を負担して別なのを仕入れます。」

動物商の話に私は乗った。その結果、話がまとまって一週間後に、新たな牝のシェパードが北海道内のどこから我家に届いた。ところが、その犬を見た途端、妻が叫んだ。

「パパ、これはひどいわ。見てよ。身体は痩せているし、尻尾の毛だって貧弱すぎるわ。それに鼻の頭だって、こすれて汚いじゃないの。」

妻にそういわれるまでもなく、目の前の仔犬は余りにも貧相だった。その上に、この仔犬はドイツシェパードの悪い性質を引き継いでいた。体臭が強く、お尻の始末がまったく出来なかったのだ。

妻はそこで溜息をついた。それからまた、呟くようにいった。

「パパ、この犬返しません。だって、これじゃひどすぎるもの、・・・・・・。」

私も一瞬、そう思った。ただ、この仔犬を返してしまえば、もう次の犬は期待出来ないだろうとも思った。そこで相談とも意見ともつかない考えを口にした。

「まあ、返すのも一つの策かもしれないが、そうしたら二度と我家ではシェパードを飼えないぞ。だって、犬を買う金だって残っていないじゃないか。」

「そうね、多分そうなるわね。」

そこで夫婦の会話は必然的に行き詰まった。途方に暮れ、再び目の前の仔犬に目をやった。

無言の時間が流れた。表現出来ない不満や怒りも抱えていた。しかし、苦情をぶつけるべき相手が悪かった。

「仕方ない、これで我慢しよう。」

私は最後の決断を下した。ドイツシェパードという犬にはその前から特別な期待があっただけに、それは苦渋の決断だった。

救世主アンディー　その二　生母と養母の決闘

アンディーが我家にきて約一年、この犬の風采に変化はなかった。ただ、人一倍の食欲こそ嫌われたが、性格のよさと素直さについては、誰もが認める牝犬に育っていた。

ある日、アンディーと一緒に育っていた北海道犬の牝が子供を産んだ。それから、アンディーにとってまだ見たことのない犬の子育てが彼女の目の前で始まった。

アンディーは最初から、その様子に特別な興味を抱いた。朝から晩まで、アンディーは北海道犬の牝が子育てにいそしむ様子を眺め、落ち着きなく、その周りを歩き回る。それから、少し離れた場所に座って、一から十まで頭を傾げながら観察する。その姿は私達にとって微笑ましく、自分の子供を何人も育てている妻などは、

「切ないわねえ、・・・・・・!」

といって涙ぐむほど印象に残るものだった。

その子育てが始まって一ヵ月後、元々小さいときから我侭だった母犬が頻繁に子供達のそばを離れる時間が増えていった。それと同時に、まだ乳飲み子だった仔犬達は鼻を鳴らして泣き叫び、母親の姿を虚しく捜し求めた。

そんなある日、裏庭で一種異様な事態が起ころうとしていた。

私がその日、裏庭を覗くと、いつもの顔触れがすぐ目に飛び込んできた。数と種類だけでいうなら、裏庭には北海道犬の牝親一頭とその子供達。それからアンディーがいて、アオクビアヒルの雛も一羽いた。ところが夫々の配置を見ると、様子は昨日までとまったく変わっていた。

裏庭の一画にオッパイをふくらませた北海道犬の牝がポツンといて、後のすべてがアンディーの脇腹の下にいる。それと同時に、腹に響く唸り声がふたりの牝犬から伝わってくる。

それは不思議な光景だった。理解の難しい世界がそこにあった。ただ、成行きのいかんに係わらず、私は黙って事態の推移を眺める道を選んだ。

五分、そして十分。事態はそのまま硬直状態をつづけた。ところがある瞬間、

他から雑音が入ったのをきっかけに事態は思わぬ方向に発展した。
母犬が唸りながらアンディーに近付く。それを迎え撃って、アンディーも身構えながら立ち上がる。ふたりの距離が一歩毎に縮まり、双方の間にやがて一メートルの間隔もなくなる。
次の瞬間、母犬がアンディーに飛び掛る。それを迎えて、アンディーは一旦相手を振り飛ばし、倒れた身体の上にしっかりと自分の体重を掛けて乗り掛かる。
時間にして十秒か十五秒。あるいは一分を越えただろうか。ともかく勝敗は一気に決着する。
負けた母犬は裏庭の隅にすごすごと引き返す。勝利に胸を張るアンディーは裏庭の中央に位置を占め、アヒルの雛と一緒にすべての子供を余裕しゃくしゃく抱え込む。
恨めしそうな母犬と睨み付けるアンディー。きわめて不思議な世界がそこから始まる。

救世主アンディー　その三　養母の魔術師

生母の牝犬に代わって母親の権利を獲得した養母のアンディー。その姿は日に日に進化を遂げた。
母親の特権を獲得する前から、アンディーはおどおどしながら母親の代役を始めていた。たとえば、生母だった牝犬が仔犬の世話を放棄して産室を離れた場合など、アンディーは早速くその場に近付き、仔犬達のお尻を舐め回しながら、排便や排尿を促してやった。また、仔犬達が鼻声を出して不安を訴えたときなど、アンディーは小さな産室にそっと潜り込み、子供達を自分の脇の下に

抱え込んだこともある。

アンディーは当時、一歳から二歳の間。牡犬との交尾経験もなければ、自分の子供を産み育てた経験などまったくない。さらに、自分とほぼ同じ年齢の犬と一緒に育ったアンディーには、犬の子育てを見習う機会もその時点までなかったのはいうまでもない。

しかし、生れて間もない仔犬の鼻声や匂いを嗅ぐと、アンディーの身体は自然の摂理にしたがって動き出したようだ。それはあたかも、ホルモンに支配されて機械的に動く小鳥や、もっと下等な魚類の繁殖行動とか育児行動にも通ずるものがあったのだろう。

生母との戦いで母権を獲得したときから、アンディーの姿は一段と変わった。第一に、彼女には母親としての威厳と品格が急に備わった。我家にきた当初、私や家族に貧相だとか、卑しいだけで品というものがまったくない、とまで散々にいわれていたあのアンディーが、ドイツシェパードの牝犬もしくは一頭の母犬として、文句のない風格を突如備えてしまったのである。

その余りにも急激な変貌に、私は驚き、信じられない思いが確かにあった。しかし、アンディーによってさらに驚かされる話はその先にあった。

母権獲得後の三日目、アンディーのお腹に二列の線が現れた。それは日を追って膨らみつづけ、一週間後にはとうとう母乳まである程度出始めた。

(嘘だろう。そんな馬鹿な、・・・・・・?)

私は口の中で何度も呟いた。ときには獣医学部の先生にこの話をして、率直な意見を求めたこともある。

そんなとき、私の問い掛けに多くの先生や専門家といわれる人々が首を傾げた。私がもし研究者の端くれでもなければ、

「冗談もいい加減にしなさい!」

と怒鳴りつけられた可能性も否定出来ない。

生れて二ヶ月、離乳期に入って活発に遊ぶようになった仔犬達の前で、アンディーは完全な、あるいは理想的な母親の姿をしていた。そればかりか、アンディーに育てられた北海道犬の仔犬達は生涯、彼女を母親として認め、彼女に慕い敬う態度を棄てなかった。ただ、立派な養母アンディーの陰で、後日ある悲劇も起こっていた。

仔犬達が生後八ヶ月を迎えたある冬の日、なにかの事情で私は当時大学に移していた仔犬達の小屋に生母の牝犬を入れ、そのまま自宅に戻った。そして翌日、大学に出た私の目に痛ましい事件が飛び込んできた。腹から首を咬まれた生母の母犬が自分の子供達によって無残に殺されていたのである。

大学の犬小屋はそのとき、確かに狭かった。しかし、仔犬達はその中で楽しくやっていたし、長期に渡らなければ、それはそれで問題もなさそうに思われた。ところが、その狭い犬小屋の雪の上に、朱に染まって倒れる母犬の姿は、まさに目を瞑りたくなるほどの悲惨な光景だった。

救世主アンディー　その四　主人を叱る犬

ドイツシェパードの牝犬アンディーが三、四歳を迎えたころ、我家には三人の子供がいた。上は長女で八歳、次は四歳の長男、さらにその下には生れて間もない次女がいた。

アカゲザルの仔と一緒に育った長女は動物が大好きで、すべての動物に優しい娘だった。また長女は相手をする動物達からもよく慕われていた。

日が暮れて夜になると、アカゲザルの仔は毎晩、長女にすり寄り、哀願するような姿で娘をベッドに誘った。ところが日中、なにかの理由で妻と私が一緒

に家から離れると、アカゲザルの仔は娘をいたぶり、傷が出来ない程度に咬み付くことも少なくなかった。それでも、アカゲザルの仔に対する娘の友情や愛情は変わることがなかった。

北海道犬と育った長男は、当時から元気で腕白な子供だった。後日、中学生になった長男は私のアラスカ行にも最初から加わり、オオカミの調査や研究に携わる私の右腕として、大いに助けてくれた子供でもある。

ある日のことだった。私が本を読んでいたとき、少し離れた場所から妻が長男を叱る声が聞こえてきた。そこで私は読書を止め、妻の声がした場所に顔を出した。

案の定、妻はそこで長男を叱っていた。理由は今思い出せないが、長男がなにか悪いことをしていたことは間違いなかった。ところが、わずか四歳に過ぎない長男が妻の前でふて腐れ、まったく謝る素振りも見当たらない。

そこで、妻に代わって今度は私が長男を大きな声で怒鳴りつけた。と、そのときだった。

日中の真夏のこと故、寝室の窓が開いていた。その高い窓から、なにかが私のすぐ前に勢いよく飛び込んできたのである。

予想外の事態に、私は一瞬惑った。何故、我家の中でそんなことが起こるのか、とっさに理解出来なかった。

落ち着きを取り戻した私の目に、アンディーの姿があった。きちんとお座りの姿勢をとり、私に向って目をらんらんと光らせている。

「おい、アンディーどうした？」

私は声を掛けた。相手の意味するところが分からず、いつもと違う控え目な態度で聞いてみた。しかし当然ながら、牝犬のアンディーには人間の言葉で返す方法がない。ただ、とても必死な態度で、私になにか訴えようとしている姿

がそこにある。

私は考えた。ゆっくり自分の周囲を見回し、再び目の前のアンディーの姿を眺めた。そして突然、アンディーのいわんとする言葉に思い当たった。

「おいアンディー、分かったぞ。お前は私が幼い子供をこうして怒りつけているから、止めろといいたいのだろ。どうだ、・・・・・・?」

すると、今迄怒りを露にしていたアンディーの様子が急に変わり、それまでの緊張した姿勢を崩して私に甘える態度をとり始めたのだ。

「アンディー、ごめん。俺が悪かった。ここは素直に謝るから許してくれ。幼い子供を大人になった男が怒鳴り散らすなんて、本当に済まなかった。もうこんな風に息子は怒らないよ。」

アンディーのいいたいことが分かって、私は素直に謝った。そしていった。

「アンディー、お前は小さい子供に優しい母親なんだね。」

救世主アンディー　その五　仔ギツネ達の養母

アラスカでオオカミの研究をするには、日本という環境は決して有利といえない。何故なら、日本にかって生息していた二種類のオオカミ（ニホンオオカミとエゾオカミ）は明治の中期から後期に絶滅しており、オオカミの近縁種にしても、我国では見当たらないのが現状である。

また、日本に生息する大型の野生動物の多くは単独生活者ばかりが目に付き、アラスカのオオカミ（ハイイロオオカミ）に匹敵するような社会性の豊かな動物も見当たらない。

生物の分類学上でいえば、最大の近縁種は北海道犬などの飼犬ということになるが、前者が典型的な野生なら、後者は家畜の最たる事例に過ぎない。

次に注目されるのが、北海道に生息するキタキツネや本州に生息するホンドギツネである。そこで、アラスカのオオカミ研究を目指した私はまず北海道犬の特徴をある程度調べ、次にキタキツネの研究に着手することを考えた。

昭和五四年、三七歳のときに私は三つの相異なるキタキツネ研究を同時に平行してやろうと考えた。

一つは自然界に出掛けて野生のキタキツネの生活や行動を観察すること。そのために私は学生を連れて日高山脈の山麓からオホーツク海の沿岸に観察地を設けた。

次に、私は飼育と管理の点で都合のいい養殖ギツネの仔を数匹業者から買取り、自宅や大学で飼育しながら、多くのことを調べようと思った。

そして三つ目は、野生の仔ギツネの成長と発達を細かく調べるために、自然の中からなんらかの方法で仔ギツネを集め、比較的に自由度のある環境を作って、彼等の様子を近くから観察することを考えた。

ただ、この三番目の目的を達成するには、最初から問題があった。それはつまり、私の設定した飼育場から野生の仔ギツネの脱走をどう防ぐかという問題だった。

大学の研究費は当然限られていた。その上、我家は元々家計が貧しく、必用にして十分な飼育場を自分の力で作る余裕など、どこを探しても見当たらなかった。

途方もない発想かもしれないが、そんなとき私はふと、アンディーの存在を考えた。彼女が見せる母性愛の強さと広がり。それにこの際、賭けてみようと考えたのである。

我家の庭は全体で百坪足らず。その正四角の境界に私はまず、高さ約一間の塀を改めて自分の手で作った。それから、野生の仔ギツネの捕獲情報を全道に

張り巡らせた。
季節は六月、その二ヶ月前ころ、自然界ではキタキツネの出産が始まっている筈だった。
ある日、電話が鳴った。出てみると電話の相手は旭川動物園の職員で、
「野生の仔ギツネが二頭、旭川の郊外で捕獲され、ここに昨日から持ち込まれています。必用であればこちらから送りますが、どうしますか？」
という話だった。
そこで私はよろしく頼みます、と電話口で返事をしながら、仔ギツネの到着を待ち構えることにした。
翌日の午後、確かに二頭の仔ギツネが段ボールの箱に入って送られてきた。中をのぞくと予想よりも少々大きく、目算で生後二ヵ月半から三ヶ月といった感じの仔ギツネがそこに見えた。
その姿にふと、私は不安を覚えた。
（もしかしたら、これだけ大きくなっていると、野生の仔ギツネの方がアンディーを受け入れないか、あるいは拒否する可能性もあるな、・・・・・。）
それでも私は、実際にやってみる価値はあると思った。
学生の手を借り、まず仔ギツネの入った箱を塀の内側に下ろした。それからベランダの窓枠に腰を下ろし、事態の推移を眺めることにした。
こちらから特別な指示を出すまでもなく、アンディーがゆっくりと仔ギツネの入った箱に近付く。その場に着くとアンディーはます首を下げ、箱の中をのぞき込む。するとやはり、箱の中からアンディーを積極的に向かえ入れようという仔ギツネの姿と声が辺りに響き、私の期待も大いに膨らむ。
私はベランダを離れて仔ギツネの元に近付いた。アンディーの頭をなぜ、彼女のいるべき場所を指示した。それは我家の庭の中央だった。

もう一度学生の手を借りて仔ギツネの箱を庭の片隅にずらし、そこで蓋を開け放った。すると期待通り、目の前で劇的な出会いの儀式が即座に始まった。

私の指示に従い、アンディーはその場を座ったまま動かない。その替わり、二匹の仔ギツネが箱から飛び出し、一気にアンディーの面前に走り込む。

尻尾を左右に激しく打ち振る。全身を躍動させながら仔ギツネ特有の喜びを現す。さらには、アンディーの首や頭や耳に何度も何度も咬み付く。

勿論、それは仔ギツネが初対面の挨拶で見せる挨拶の一つだから、彼等がたとえそうして咬んだとしても、アンディーの身に決して問題は残らない。

仔ギツネは同じ行動をつづける。アンディーもまた、その行動を初対面の挨拶と受け流し、首を左右に避けながらも、決してその場を離れない。

こうして大型の牝犬と、野生から出てきたばかりの幼い仔ギツネ達との初対面の儀式は無事終わった。そとれ同時に、養母としてのアンディーと養子としての仔ギツネの関係も定まり、終生その関係が壊れることはなかったのである。

救世主アンディー　その六　最後の別れ

常々、私は人間も動物も、夫々の生命力や寿命に従って生き、そして死を迎えればいいと思っていた。そのせいかどうか、私の手元で育った飼犬の多くは十歳を越えた辺りで死のときを迎える。

アラスカオオカミの研究をライフワークと心得た私にとって、アンディーの功績は数え切れない。陸生の亀に始まり、ニワトリやアヒルやガチョウ、それからシマリスからアカゲザルに至る数々の哺乳動物。その中には十字ギツネや北極のキツネも複数含まれる。

これらの動物を我家で飼うとき、一番必用だったのがアンディーの懐深い母

性愛であった。彼女が庭の中にいる限り、すべての動物が彼女の周りに子供として集まり、不安なく日々を送ることができたのである。

そのアンディーも十歳を越えるころから病気を患い、幾度となく庭の中で大量の血を吐くようになった。私はその度に自分の大学に設けられた動物病院に出掛け、吐血の原因と治療について相談を持ち掛けた。しかし、基礎的な研究にこだわる大学の動物病院では、いかなる治療法も見付けてはくれなかった。

初秋のある日、アンディーは遂に倒れた。呼吸が乱れ、心拍も異常に高まった。その苦しそうな姿を見たとき、私は腹を決めた。家族を集め、一つの提案を行った。

「見ての通り、アンディーの命は短い。そこで倒れたままこうして起き上がることも出来なくなったアンディーを囲んで、私達の寝室を皆この居間に移さないか。それがアンディーの最後を見守り、見送ってやる最善の道だと思うが、どうだろうか、・・・・・・?」

すると案の定、家族全員の答えは即座に決まった。それにつづけて、

「じゃ、皆。アンディーをこの部屋の中央に寝かせて、私達は各自自分の部屋から布団を持ち込もう。そしてアンディーの周りを取り囲むように今夜から寝ることにしましょう。」

と妻がいった。

その言葉を引き継ぎ、私はさらにもう一つの提案を付け加えた。

「長女のお前のことをアンディーは昔から頼りにしていたよな。だから、どうだろう。お前しばらく高校を休んでアンディーに付き添わないか、・・・・・?」

ただ、以前からの娘の心を知る父親にとって、その答えについては今更返事を聞く必要もなかった。

十畳の居間の中央にアンディーが横たわり、その周囲を毎晩家族全員が取り

囲んで寝る。するとまだ動かせる片方の前足をゆっくり弱々しく使って、アンディーは誰彼なく相手の身体に触る。そうすると、触られた相手はアンディーの頭や身体に手を触れ、

「ここは痛くないの？」

といってはさすりつづける。

そうされると、アンディーはいかにも嬉しそうな顔をして、しばらくの間目を閉じる。

こうして一夜目が開け、やがて二日目の夜が始まる。そのとき、私は長女に向ってもう一つの話を持ち掛けた。

「見ての通り、アンディーの状態は悪化の一途を辿っている。それに、本人の苦痛も日々増幅しているように見える。そこで相談だが、私はアンディーに安らかな眠りを贈りたい。ただし、アンディーとの親密な関係という点ではお前は私よりも深かったと思う。そこでいつ、アンディーを楽にさせるか、それはお前の判断に任せたい。どうだろう、・・・・・・？」

娘は少し考え、それから落ち着いてこう答えた。

「つまりアンディーを楽にするために、麻酔薬を打ってやるのね。でも一日だけ待って。今夜一晩、私は私なりにアンディーと話し合いたいの。それでいいでしょう、・・・・・・？」

アンディーは結局、三日目の夜八時、家族皆の見守る中で最後の息を引き取った。誰もが自分の泣き声を咬殺し、ひたすらアンディーの冥福を祈るばかりだった。

翌日、下の子供達は花屋から生花を沢山買ってきた。私は息子達の手を借り、大きな白木の箱を作った。それからさらに、その蓋を白木でしっかり作り上げた。

数日後、隣に住む年寄りがやってきた。そして遠慮がちに、私に向ってこういった。

「あの、お宅の犬のために作った白木の箱は見事でしたね。それに沢山の生花を身体一面に掛けてもらったあの犬は幸せ者ですよね。出きたら、私もあんな風に送ってもらいたいのだけれど、どうでしょうか。やはり駄目ですか？」

その話を耳にしながら、私の家族はどこか納得するものがあった。

当時、高校の二年だった長女はそれから一ヶ月近く学校を休んだ。そして再び学校に戻るとき、彼女ははっきりと私にこういった。

「パパ、私はもう二度と動物は飼わない。」